

# 講演録

平成二十二年 度 ボーイスカウト日本連盟全国大会 基調講演

## 「スカウティングの原点を求めて」

——スカウト魂とはなにか——

公益財団法人ボーイスカウト日本連盟 理事長 奥島 孝康

講演日：平成22年5月29日  
場 所：静岡県静岡市「ツインメッセ静岡」



公益財団法人  
ボーイスカウト日本連盟

## I はじめに

### ——亡国の兆しの中で——

いまから私が話すことは皆さんのお耳を汚すことになるのではないかと思います。

いま何が問題か、また、スカウトはどうあるべきかについては、なにも私がこれから話すようなことだけでないことは、当然の話であります。しかし、何事であれ、指揮官が明確な方向を示さなければ全体が動かないということも古今東西の歴史の示すところでもあります。私という、理事長としてまずい選択をされた皆さまにとっては、大変申しわけないことでありますけれども、しかし、私は私なりに指導者としての方向性あるいはそのあり方を、まず皆さんにご披露して、そして皆さんからのさまざまなお意見を聞きながら軌道修正し、これからのスカウト運動の全体の方向性を決めていきたい、こういうふうに思います。今日はそういう意味での、一つのテンタティブな試論にすぎないということをご承知おきいただきたいと思えます。

「ローマ人にとっては、平和は訓練であり、戦争は省察である」、とモンテスキューは言っております。省察というのは考察・反省にほぼ近い意味ですね。反省の「省」と、それから観察の「察」であります。もう一度言います。「ローマ人にとって、平和は訓練であり、戦争は省察である」と。

この言葉には、ローマ人ならぬわれわれも、やはり重く噛み締めなければならぬものが含まれています。なぜならば、千年王国と言わ

れる史上最長の大帝国をつくり上げたのは、歴史上ただ一つ、ローマだけであります。ほかのどんな帝国も1000年続いた例はありません。とすれば、ローマ人の知恵があの1000年の歴史をつくったのです。モンタネッリの『ローマ人の歴史』（中公文庫）という本を読めば分りますけれども、ローマ人は1000年の間に人類がこれまでに経験したあらゆること、つまり、政治上、経済上、社会上、人倫上のあらゆる悪徳、悪業、腐敗というものをすべて経験したので、丸山真男先生によれば、ローマの歴史をたどることによって、われわれは人間の営為のすべてを知ることができるとさえ言えます。ですから、ローマ人がどうやって、千年王国を築くことができたのかというと、「ローマ人にとって、平和は訓練であり、戦争は省察であった」という言葉が、私はその理由を示しているのではないかというふうに思っております。平和が訓練であるのは、平和なときに戦いに備えることを怠っておれば、いざ戦争が起ったというときに対応できないのは当然であります。しかし、戦争が起ったときに、どういうふうに対応するか。ローマ人は小さな成功からも、大きな失敗からも、また、大きな成功からも、小さな失敗からもすべて同じようにその中から教訓を導き出したと言います。そのことが、彼らにとってあの千年王国を築く基礎、前提となる姿勢だったのであろうと思われまます。

現在、亡国の兆しに見えるわが国において、ボーイスカウト運動も大きな試練に直面しております。どういうふうに着て直すべきか。ローマの千年の歴史に比べれば、日本のそれはただか30年の問題にすぎません。しかし、30年という期間はばかにできません。ワン・ジェネレーションというように、これは、一つの時代の転換期であります。

このわれわれが直面する嵐の時代を、どうやって抜け出し、スカウト運動の明るい未来をつくることができるか、というよりも、むしろ、スカウト精神を身につけた子どもたちによって未来は担われるわけでありますから、われわれの未来というものをどうつくりあげるか。そういう意味では、非常に大きな選択をわれわれはせまられているのだと、こういうふうを考える必要があるのではないかと思えます。

私は法律家でありますので、イエーリンクの『権利のための闘争』（岩波文庫）という本の中の、有名な一節、「ダス・ツィール・デス・レヒト・イスト・デア・フリーデ、ダス・ミッテル・デアツウ・デア・カンフ」とつまり、「法の目的は平和であり、それに達する手段は闘争である」というフレーズが大好きです。われわれは、なにかと闘うときは、正しいことのために闘わなければいけない。ましてや、われわれの未来を託す大きな希望としてスカウトを育成しようというのであれば、われわれはそのために全力を尽くさなければならぬ。全力を挙げて闘わなければならぬ、こういうことでもあります。

ローマ人はこんなふうに言っております。「シー・ビス・パーケム、パラ・ベリユーム」。ラテン語で何と言っているのかと言いますと、「平和を欲するのであれば、戦いに備えよ」です。まさに、いま言いましたように、ローマ人にとって平和は訓練であり、戦争は省察であるという中身をもっと分りやすい言葉で言えば「平和を欲するのであれば、戦いに備えよ」ということになり、ローマ人たちはこの「備えよ常に」という姿勢で千年王国の基礎を築き上げたわけであります。

わたしたちがボーイスカウトの問題に対応するとすれば、ローマ人があれだけの強大な世界帝国というものをつくり上げたその知恵に学

ぶということは、私としては、どうしても必要なことではないかと思っ  
ているのです。ボーイスカウトが本当に、日常的に訓練と取り組む、  
この世の中の未来の基礎をつくるための訓練に励んでいたとすれば、  
私は今日のような事態は起らなかったのではないかと思っ  
ています。つまり、わずか四半世紀足らずのうちに、30万人の体勢から一挙  
に15万人の体勢に半減するというようなわが連盟の状況は生じなかつ  
たのではないかと思っ  
ています。結局、平和な時間をわれわれは無駄  
に使いすぎたのだ、そういうふう  
に反省しております。

では、いまだどう戦うか。戦争ではありませんけれども、あ  
る意味でボーイスカウトのあり方というものをどうやって改善するか、  
そして、ボーイスカウトをもう一度、世の中でその存在感を高め、プ  
レゼンスを強めるためにはどうしなければいけないか。そういう意味  
で、いま、必要なのは省察であり、訓練であります。しかし、この省  
察、要するにじっくり考えて問題を解明し、その対策を実行に移す  
ことでもあります。ローマ人の良いところは、後でもう少しお話しす  
けれども、何といっても、単に考えるだけではなくて、絶えず戦いな  
がら、その中からいろんな教訓というものをくみ取っていった。その  
教訓のくみ取り方から学ぶ必要があります。われわれはいま、大きな  
危機に直面しております。では、その危機の中から、あるいは大きな  
失敗の中からどう  
いう教訓をくみ取るのか。もしも、本日、表彰され  
たように、団として成長を遂げているような団があるのであれば、そ  
の団からわれわれはどういう教訓を引き出すことができるのか。その  
教訓から積極的に学んでいかなければいけない。つまり、成功してい  
る団がある。その成功している団は、いったい何が原因か。その原因

は非常にはつきりしております。おそらくは指導者です。指導者がどういう取り組みをしているかということによって団のあり方は違ってくるのだらうと、私は考えております。

では、その指導者はどうして成功したのだろうか。私に言わせれば、おそらくそれはスカウティングの本質というものをうまく捉らえているからだろう。もしも、それをとらえていなくて成功しているとしても、それはしばらくの成功であって、おそらくその成功はそう長くは続かないであろうとさえ思っています。われわれは、小さな失敗も、小さな成功も決して見逃さずに、その中からわれわれが学ぶべきものをしつかり見出さねばいけない。それがこれまで出来ていたかどうかに成否はかかっています……などというふうに私は偉そうなことを言っておりますけれども、しかし、スカウティングの現場で働いている人たちは、そんなもんじゃなく、もつともつとわれわれは苦労しているぞ、とっておられることは私も重々承知しております。そんなこと言うんだったら、おまえがやれと言われかねません。もとより、もつと若ければ私もやってみたいと思います。しかし、もう時間がありません。それどころか、そういうことをお互い言葉の上で投げかけてキャッチボールしていたのでは、おそらくスカウティングの前進というものはないだろうとさえ私は思っております。

そこで、今日の私は、スカウト精神に何が求められているか、スカウト精神のいわば原点（スカウト魂）に当るものはなんであるかということについて私の日頃の考え方を話したいと思うわけでありまして、それは私が考えていることであって、皆さんにとって参考になるなどというふうにお考えになる必要はない。それはいくつもの考え方の「ワ

ン ノブ ゼム」にしか過ぎないけども、しかし、少なくとも私が理事長としてスカウティングに取り組む以上は、私はそういう考え方を基礎にしてこれからの職責に取り組む覚悟であるということだけはご承知おきいただきたい、ということを意味します。もちろん、私の考え方の誤りは明らかになり次第正して参ります。十分でないところはあるだけ早く修正して参ります。われわれは、人生はやり直しがきかない、そして運動に対する対応もやり直しがきかない、しかし、いずれも建て直しはいつでもできる。そういうつもりで、これからのスカウト運動に取り組んでいきたいというふうに思っております。

私が理事長に就任しましたときに、最初の理事会で就任の短い挨拶をいたしました。そこで私は現在のスカウト運動に三つの大きな問題点ないし弱点がある。それは何かというと、第一に組織が空洞化していることである。いま、ボーイが15万人、16万人といっております。4割近くが成人の指導者であります。そして、富士スカウト章を受ける人はたくさんいますし、指導者講習を受ける人もどんどん出てきております。しかし、いずれも現状では指導者としてはそれほど期待できない。はつきり言って、いまの指導者の中にはスカウトというものとの原点をどこかに置きわすれている方が多少なりともいるのではないか、というのがやや冷やかすぎるかも知れませんが、私の率直な感想です。そういう感じでもって受け取っているということでありまして。

第二の問題点はスカウトの活動が室内化している点です。アウト・ドアの活動ではないことです。室内化してはいけないのか。私は、そのことだけを単純にとらえていけないなんてことを言うつもりはあり

ません。しかし、スカウティングの原点は何であつたか。スカウティングは何を求めているのかという点から見ると、活動が室内化するという、そういう極端な方向性は非常に問題であります。むしろ間違っております。スカウティングとはなにも予備校で習うみたいいろいろな知識を学ぶ座学ではない。私どもの大学、早稲田大学をつくった一人である坪内逍遙先生は、早稲田の教育方針として絶えず言われていたのは、「知識よりも感銘を、感銘よりも実践を」という言葉でありました。私はその感銘のところを、もっと分りやすいように感動という言葉に言い換えて、「知識よりも感動を、感動よりも実践を」と言っております。学校教育とスカウティングは相互補完の関係があります。それが「知性」と「野性」の関係です。スカウトは、自ら行動する。そういう行動力による実践ということが知識を社会に還元する方法であります。スカウトの「奉仕」とはまさにこのことであります。

それから第三に、公共心の稀薄化が問題です。公共精神というのは何かと言うと、パブリックという文字を考えてください。日本では、パブリック・インタレストを公益と解しこれを私益、プライベートインタレストよりも上位のものだというふうに考えている。ところが違うんですね。パブリックというものは、プライベートな個人の集まり、つまり、大衆がかかわっているということにすぎない。大勢の人がかかわっている社会生活というものは、人は一人で生きていくことはできない。人は社会（＝他者）とのかかわりの中で生きています。このことを、スカウトに小さいときから「社会」という観念をたたき込むことが必要だというふうに考えることがスカウティングの第一歩なのです。

そういうふうと考えていきますと、このパブリック・スピリットと

いわれるものは、われわれは社会の中で大勢の人たちに生かされている、だから、われわれは世の中に対してお返ししていかなければいけない。スカウティングを通して、宗教心を基礎に置いた他者に対する愛というものが、博愛あるいは友愛を絶えず育んでいかなければいけない。そういうことがスカウトにとつては非常に大事なことであり、そういうふうに思っておりますけれども、その大事な愛を育てる上で不可欠の組織が空洞化しつつある。まことに由々しき事態です。

ところで、スカウティングはパトロールが中心であります。つまり、班が中心であります。班というものは、8人編成が基本であります。スカウトたちは、班における緊密な共同生活をともにし、日々の活動をともにする中から、このチームワークのよい一種のミニ社会をつくり上げ、体験し、その中で社会的な訓練を受けていき、そして社会はこうあるべきだということを単に学ぶだけではなく、実感していく。ですから、パトロールの体験の中から私はスカウトのあり方のプロトタイプが出てくるんだと思っております。

それゆえ、スカウティングの室内化が最大の危機の原因です。当然のことながら、室内化には野外の危険はありません。けれども、危険でないような活動あるいは生き方というのがいっただい、何を生むかわれわれは周りにいっばい危険を抱えて生きております。そういう中で、われわれは危険から逃げ出すのではなく、危険というものをコントロールし、マネージし、それを克服するためのスキルとか知恵とかを身につけるくらの積極的な生き方を考えていかなければいけないし、そういう指導者を養成したいものです。ところが、活動が室内化することによって、そういうことがみんな忘れられてしまう。自分の

ことしか、考えなくなってしまう、というような別の危険が出てこないか。危険から逃げる危険の方が社会の未来にとってはもっと怖い問題を抱えることにはならないか、ということでもあります。だから、「備えよ常に」なのです。

それから、公共心の稀薄化をどう考えるか。いまでも、当然ながらスカウトが奉仕をしている姿を見かけることはあります。たしかに奉仕をしている現場を見かけはしますけれども、ただ赤い羽根の募金であるとか、緑の羽根募金であるとか、それはそれとして大事だが、それだけだといささか安易にすぎはしないか。また、自分たちが企画した奉仕活動というものには、比較的熱心に取り組むけれども、他人の企画した奉仕活動には比較的冷淡であるように思います。われわれはそういう姿勢でよいであろうか。自分の演出は考えても、社会のすぐれた活動には参加しない、協力しない。そんなことでスカウティングといえますか。スカウトの最大の義務のひとつは社会に奉仕することです。大切なことは、世のため、人のためであれば、誰が考え、誰が主催していいようが、その奉仕活動に積極的に参加する、というような意識があつてしかるべきだと私は考えておりますけれども、そういう協力、参加は、実際にはまるで見られない、というところ極端すぎますが、そんな対応姿勢が少なからず見られます。そんなことでいいのでしょうか。

人が見ていない奉仕活動、社会に注目されない奉仕活動は熱心にやらないというふうなことで、はたしてわれわれは本当のスカウトを育てていることになるのでしょうか。そういうことを考えながら、私はローマ人の、「ローマ人にとって、平和は訓練であり、戦争は省察で

ある」という言葉から、スカウティングとは何か、について私なりの解釈を試みたいと思います。

## II スカウティングの原点(1)

### ——ベーデン・パウエルに学ぶ——

スカウト運動の原点は何かということを考えてみます。もとより、すでに実際には、みんなで知恵を出し合つて、これまでのスカウト活動の方針は出ております。それがきちんと実行されればいいんだという考え方もないわけではありません。むしろ、それでよい。私はそれが間違っているなどというふうには考えません。しかし、人間は基本動作を覚えて、人形のようにその基本動作とおりに動けばよいというわけにはいかないんです。そこにはパッション(情熱)あるいは魂がなければいけないのです。

マックス・ウェーバーは、『職業としての政治』(岩波文庫)においても、『職業としての学問』(岩波文庫)においても、この二冊の講演において政治と学問との共通の要素を述べているところがある。それがパッションです。このパッションというわけの分らないもの、わけが分らないけれども、人間を根元から突き動かすような大切なもの、そういうものをわれわれがスカウト運動に対して持たないのであれば、私はスカウト運動に未来はないとさえ思っております。

そうした角度から考えていきますと、私はやっぱりまず、この原点というもの、つまり、スカウト・スピリット(むしろ「スカウト魂」とは何かという問いかけ、それがわれわれに共通するものとしてしつ

かり共有されなければいけない。こうして共有されるべきスカウトティングの原点とは、おそらくベーデン・パウエルの考えるスカウト運動の原点であろうと思われま。

私はこういうことについて多くの資料を読んでいるわけではありません。ただ、手元にある数少ない資料に目を通していただけにすぎません。もつとも、吉田俊仁事務局長がだいぶ資料を提供してくれましたので、これから勉強するつもりではあります。

そういうわけで、ここで私がお話することは、私の体験から出た考え方が中心であり、文献上、あるいは歴史的には皆さんのほうが詳しいかも知れない。たぶんそうでしょう。そこで私は、ベーデン・パウエルがスカウト運動に対して、どうしてパトロールとウッドクラフトを中心とする活動を必要だと考えたか、そこだけについて、私なりに考えていることをてがかりに自説を展開していきたいと思えます。

ベーデン・パウエルは、軍人としてボーア戦争でイギリスが危うく敗れかけたという事態を見て、こんなことでは駄目だ、国の未来を支えるのは若い兵士たちをもっとしっかり鍛えあげなければいけないと考えました。これがスカウト運動に取り組む最初のきっかけであったということは、事実であります。しかし、晩年にはスカウトを戦争の戦士から平和の戦士へ、スカウトの位置づけに関する彼の考え方が次第に変わっていったことは、彼は後に陸軍中将にまで昇任しますけれども、その陸軍中将の地位を捨ててもスカウト運動にのめり込んだことから知られます。つまり、B・Pがパトロールを中心に構想したスカウトイングによって青少年を鍛えようとしたのは、ご存じのとおりパブリックスクールと軍隊でもつとも必要なのは、お互いに助け

合うという協力（絆、つまり、チームプレー）であります。パトローリングにおいて班員が分担して四方八方に目を配っているときに、こいつはあてにならないという者がいると思つたら、危険でとても自分の担当のところだけを見張っているわけにはいけません。だから、信頼関係のある仲間をつくるのがパトロールの戦闘力を高めるのです。これが後にお話しますけれども、イギリスのパブリックスクールの教育が目指す重要な目標のひとつでもあります。

そういう信頼関係をつくろうとすると、どうしてもパトロール、つまり、小さい班でお互いに作業を分担する信頼できる仲間づくりが必要であり、それがパトロール（Ⅱ班）という活動形態ないし作業形態であり、そこで人間の信頼関係をつくり上げていくということが、若者たちがお互いに切磋琢磨し教育効果を高めることになると考え、これを青少年の新しい教育方法に応用してみようとして、ベーデン・パウエルは班編成による野営（キャンピング）という方法を選んだのだということでもあります。

われわれが考えなければいけないことは、野営、つまり、なぜ、街中で、それも室内で活動しないで、野営によって青少年を鍛えようとしたかということにあります。ベーデン・パウエルの考え方については、私よりも詳しくよく知っている方がこの中にはもう何十人というらしやることでしょう。しかし、私は、私なりの見方でしか物事を理解していませんし、ましてそこまでお話しする時間はありません。ですから、私なりの理解にもとづいて考えていきますと、なぜ野営なんだろう、ということをおぼろげに考えなければいけないこととなります。こうした疑問に対してベーデン・パウエルが、ある意味でまとまった本

を書いたのが『スカウティング・フォア・ボーイズ』（1908年、日本では1957年発行）という本であります。日本語で翻訳されており、皆さんはとくにお読みのはずであります。

しかし、その中に何が書いてあるか見てみてください。「キャンプファイア物語」全26話がそのすべてであります、そのほとんどが野営についての記述です。大部分が野営の話であります。半分以上がキャンプについての記述であります。つまり、キャンプングで青少年を鍛えるということを、特に強調しているわけではありませんが、ベーデン・パウエル自身が「南アフリカの軍隊生活におけるキャンプで、本当のスカウティングを経験することができた。」（序文）と述べております。

誰にも援助されない、自分たちだけの共同生活の経験に意味があるのです。つまり、街中だったら一人で暮らしていても、いろいろな人が気を遣ってくれて、うっかり倒れでもしたら、近くの通行人はもとより、救急車やパトカーが駆けつけたりして、安心・安全に暮らしていくことができます。つまり、日常生活では、いいかげんに生きていても、街の中ならそうさして心配するような危険はないのです。

しかし、野営あるいは野外活動となると、自分たちのパトロールの仲間だけが頼りなのです。山の中で自分たちだけでどうやって過ごすか。例えば私が、上級班長だったころ、私は上級班長を2年半ぐらいやりましたけれども、このときには年長の幹部、つまり班の班長と次長など20人近くを引き連れて幹部訓練のキャンプに行くことがあります。そうすると、ある隊員が「痛い、痛い」と言うので、何だと思っ

て彼のお尻をみると、そこに「ねぶと」と言いますけれども、「おでき」の親分の「よう」ができていたんです。しかし、まだ十分熟していない。そこで、「まあ、もうあと2日ぐらい我慢しろ、その後で切開だ」と、どうせ1週間足らずのキャンプですから、私はこう言いました。で、2日後にお尻を見てみますと、表面が黄色くなって切りごろだと思えたので、私はナイフを火であぶって、スパッと切って、膿を絞り、赤チンを塗りました。いま考えてみるとチョッピリ乱暴な話かも知れませんが。しかし、傷口に赤チンを塗っておくと2日後にはきれいに治りました。彼は現在、大阪大学の名誉教授で、日本文学資料館の館長をやっておりますが、宇和島第1隊のOB会で時々一緒に酒を飲むと、彼から「いいかげんなことをやってくれたよねえ」なんて言われたりしていますけど、それで終わりです。

当時われわれは、病院へ連れていくなんていうことは考えもつかなかったし、本人自身も病院なんかはまだ行きたいというふうには思っていなかったでしょう。楽しい毎日、楽しいキャンプですから、最後まで皆と一緒にいたいと思っていたに違いありません。それで、まあ、2日ぐらいいは膿を出すために、うんと膿ませるように放ったらかして「痛い、痛い」と言わせておきましたけれども、それでもキャンプから離れたくない。山を下りて医者にかかるなんて少しも思っていない。私がナイフを火であぶって、ズバリと切るということを分っているんですけども、それについて、少しの不安も感じていなかったのです。現在でも、そういうことが許されることなのかどうか、私は知りませんが、われわれのころはそれが当たり前でした。

こうした関係は、はたして過去のことでしょうか。仲間が信用できないようでは、1週間とか、十日とか、誰とも連絡のつかないところ



で、当時は携帯電話なんかもちろんない時代でありますから、どうやって過ごすことができるでしょう。われわれは当時そういう信頼の絆で結ばれた仲間を持つということ、そういう信頼関係を築いていたということが、社会へ出てからは、自分だけで生きていくわけじゃない、いろいろな人たちのお世話になって生かされているのだということに気づき、自分もその人たちの信頼に応えなければいけないという、そういうふうな他人のために汗を流す、涙を流す、場合によっては血を流すというぐらいの思いというものを、このボーイスカウトの野営生活の中でわれわれはごく自然に学んだのではないかと思っています。こうした経験が社会に出てからわれわれにとっては、大きな力の一つになったように思われます。だから、この野営という自然との交流は、要するに、人間を鍛える最良の方法だと思えます。人間は自然の中にいると孤立無援の中で自分たちはどう生き抜いていくことができるか、ということ自分を自分たちで直接身をもって実験することを意味します。そのことをキャンプによって、理屈で覚えるのではなく、ハートで覚える。ハートで感じる。そういうふうなことを、ベーデン・パウエルは考えていたのではないか、などという推測をするわけであります。つまり、ベーデン・パウエルは、自立する人間として、生き抜く、サバイバルのできる能力を養うためには、野営という方法が最も教育方法としては優れているのではないかとというふうな考えられたようでもあります。私もまたボーイスカウトの教育法の特徴といえ、それが野営であり班というチームであるということではないかと考えているのです。

われわれが、この『スカウティング・フォア・ボーイズ』という本

の中から、何かを読み取るとすれば、そういう魂。スカウト魂というものをもまず読み取る必要があると考えているのです。現在、日本ではボーイスカウトだけの問題ではなくて、社会自体の崩壊が始まっており、社会の崩壊が始まってこの先いつたいたいどうなるのかということとを多くの人が不安感をお持ちだろうと思います。日本の「亡国の兆し」さえ感じられます。なぜかという、人間の絆が希薄になってきたからです。つまり、人間が人間であるという、最もお互いが信頼できる仲間の信頼関係が、自然界の動物よりも低下してきた。そこに、われわれは底知れない不安、恐怖というものを覚えるわけがあります。だからこそ、われわれはスカウト運動というものを再評価しなければならぬのではないかと、というふうな思っているわけがあります。いま申し上げましたように、ベーデン・パウエルの胸中というものを察するに、おそらく、野営生活という方法を通して公共心を育て、公共のために献身する、社会のために自己犠牲を払う、そういう行動のできるたのしい若者たちを育てようとしたのだと私は考えているわけであります。

私はいまでも、山を登っております。本格的に登山に取り組んでいるわけではありませんけれども、この5月も雲取山に登って参りました。雲取は2千100以上の低い山ではありますが、それでも頂上までは7、8時間かかります。それも、今回はヨモギ尾根という一番難しいコースを取りましたので、やっぱり8時間かかりました。一緒に登ったベテランの仲間たちも4、5人一緒に行っています。相、当きつい山のような。私が行く山というのは、最低で片道で6時間、時には11時間かかるなんていう山もやりますけど。そういう山登

りの中で、私は何を考えているのかというと、山を汗を流して登りながら、きつい、しんどい、たまらん、もうやめたいというふうな思いも、頭の中でちらちら浮かんでくるし、ばかなことをやったものだ、近所のコーヒー店のんびりくつろいでいればよかったなど、というようなことも、山を登っている途中一度は必ず考えます。しかし、それでも私がなぜ山を登り続けているかというところ、登頂をはたしたあとの楽しみが大きいからです。まず、第一に達成感ですね。子どもたちにとつて、一番大事なのはこういうことがやれたという達成感です。最初からギブアップしないで、挑戦する姿勢、途中でへこたれそうになっても、一緒になって励ましてくれる仲間や指導者がいる。その結果、最後までやり遂げたときの子どもの達成感というものは、すべてのことに応用がききます。つまり、ある一つの成功体験は、ほかのことでも成功するという自信をも持たせるからであります。

そういうことを考えれば、パソコンで、あるいはファミコンでゲームを楽しむことは個人の喜びであつても、他者と喜びを共有することにはなりません。大きな喜びとは何か、大きな苦勞があるからです。人間というものは大きな苦勞をするからこそ大きな喜びを得ることができます。そして大きな苦勞は友人と分担することによって最後まで頑張ることができず。ですから、私は人生についても、いつもそう思うわけであり、確かに、この問題については、いろんな見方があるけれども、人間にとつてはある状態と、ある状態の比較があるだけなんです。ある状態とある状態の比較ですから、ある状態よりも良い結果が出たときには、それを幸福と思うだけの話であり、逆に、いつもより悪い状態にあつたときには、それを不幸だというふうに感

じることがあるだけのことであつて、それは比較の対象があるからそう思うにすぎないのです。

子どもは、たとえ少々苦勞があつても、小さいときはこんなもんだと一度思えば、後になつてもう一度くり返すことをそんなに嫌がったりはしないものであります。われわれの時代には多少嫌なことでもやらされました。極端なことをいいますと、ニンジンが嫌いでも偏食なんかしますと、私のおふくろは毎日、毎日、ニンジンばかりの食事をさせました。最初のうちは食べないで頑張っていましたけれども、毎日だと腹がへつて、我慢できなくて食べる。おなかがいよいよ、毎日、何でもおいしい、慣れてくると、ますますおいしくなる、というような経験をする。人間の好き嫌いなど知れたものであります。つらい、苦しいとかいつても、たいていすぐ忘れます。そんなものかと思うようになるのです。

そこで、ベーデン・パウエルは、父母とか友人とかに支えてもらうのではなく、自分たちだけの孤立無援の、本当の仲間内だけでもつてすべてをやり抜いていこうという、そうせざるをえない生活を体験させるためには、野営という訓練方法が最も望ましいと考えたのです。これがボーイスカウトの一番の大きな特色ではないか。私は、これをなくして、ボーイスカウトの訓練というものは成り立たないと思つておられます。そういうわけで、私はこの問題を考えていきますと、ベーデン・パウエルはその著書の中では、これを市民教育でもあると書いておられます。加えて公共心とか、忍耐力とかの養成にもなる」と書いておられます。もちろん、市民教育ということはボーイスカウトの目的が、抽象的な目的でありますけれども、「グッド・シチズン」

をつくることであることから明らかです。

われわれは、ボーイスカウト活動をしているときにはいつも小さなデイリー・グッド・ターンといいますが、日日の善行という「小事」について気にするよりも、世の中に役に立つ人間になるための人格養成という「大事」を考えていたわけでありました。ところが、後で言及しますように、「小事が大事」であって、私は完全に間違っていました。よきスカウトとなるためには、世のため人のため汗を流すことにより公共心を育てると同時に、体を鍛えて社会を支える力を身につけねばいけないと考えました。そして、年齢に応じて善行を重ねる日々を送ることが、社会のリーダーとなるための基礎的な訓練なのだということがわかってきました。残念ながら、私は一年浪人しておりますけれども、中学・高校時代は好きなスカウト運動に没頭していたものから、一浪は最初から覚悟していました。もとより、私はそれでよかったなんていうことを言うつもりはありません。しかし、大学入学後にもっと勉強をして、もっと大きな意味で世の中の役に立ちたいという想いをもつことができたのは、スカウト活動をやっていたおかげであるといまでは考えています。ですから、私は会社法学者になつてから、私学の法学部の教員になりましたが、最初から私は「コーポレーション・アズ・グッド・シチズン」つまり、「良き市民としての会社」ということが研究テーマでありまして、このテーマで大学では一貫としてずっと研究を続けてきたわけでありました。もちろん、いろんな寄り道もしております。しかし、私の大きな研究テーマは、この「グッド・シチズンとしての会社」のあり方というテーマであって、「グッド・シチズン」とはなにかと問いつづけることで人生を一貫することができ

たのは、私にとっては大きな幸せであります。これも、ボーイスカウトのおかげであるというふうに思っております。

そういうわけでありますから、私は、ベーデン・パウエルが班単位の野外活動という方法によってスカウトたちに苦勞をさせ、汗を流させ、涙を流させ、痛い目に遭わせるという訓練の方法を採ったということは、まさしく卓見であると思うのです。おそらく、ベーデン・パウエルは、彼自身が経験したパブリックスクールと軍隊での生活の中からこの方法を学んだのであろうと思われまます。いまの世の中で一番子どもの教育に欠けているのは何だと思えますか。いまの子どもたちには他人の痛みが分らないということがそれでありまます。他人の心の痛みというものが分るようになれば、社会関係というものはずいぶんうまく円滑に行くでしょう。こんなことを言つては言い過ぎだとか、こんなことをしてほかの人に迷惑をかけることになるのか、ここはもっと協力しなければいけないとかいうようなことも、みんなそこから出てくる配慮であります。また、困っている人がいるのであれば、それを助ける工夫をしようということにもなります。ところが、いまの子どもたちは他人の心の痛みがなぜ分らないのか、理解できないのか。その理由ははっきりしています。それは自分が痛い目に遭っていないからです。私は、子どもにはもっと痛い目に遭わせるべきであると考えております。別にぶん殴れと言っているわけではない、野営に出して怪我させようというわけでもありません。しかし、大事なことはそういうふうには、健全な社会人として、健全な肉体を持ち健全な考え方のできる社会人として育ていくためには、野外活動によって体を鍛え、共同生活の中から社会関係というものを体で学ぶ、仲間あるい

は友人との関係を身をもって学ぶということがどんなに大事なことか、と私は考えるわけでありませぬ。

「他者の心の痛み」ということを私はいつも考えておりまして、座長として埼玉県「彩の国」の教育の方針を決めるときでも、他人の心の痛みが分る子供を育てるといふ第一の目標を私は提唱しまして、そういう教育をすべきだということを、強く主張いたしました。しかし、先ほどから申し上げておりますように、ベーデン・パウエルもこういう方法を探ることによって、野外に出させて怪我をしていいなんて思っていたわけではない。だから、「Be Prepared」というB・Pなのです。まさにベーデン・パウエルをなぞったモットーだったのです。

「Be Prepared」つまり、「備えよ常に」というモットーは、野外生活の実感として出てくるわけでありませぬ。どんな危険が待っているかわからない大自然の中の活動に、私たちは決して不安を感じたりしませんでした。子どものころ、嵐や蛇などに出会っても、少しも怖い思いはしませんでした。むしろマムシ（毒ヘビ）なんかに出会ったら、喚声を上げて喜んだものであります。これは、頭をつぶして棒にクルクル巻いて持って帰って、門口で干すか、それを焼酎の中に入れて、家人が喜ぶというくらいなものであります。まあ、青大将をわざわざ食べようというようなことはありませんけれども、しかし、青大将にかまれたら、普通の人は引く張ってはさすけど、スカウトだったらこれを逆方向に押すでしょう。歯は内側に向いていきますから、引く張っても離れませんからね。そういうことは野外活動の中で自然と覚えていきますし、たとえば尻尾を持ち上げても、青大将だったら手首まではかま首は上がってこないんです。だから絶対に

安全なわけです。当時は、2杯はある青大将があちこちいたものです。そういうことを知っていますから、私たちはたとえ青大将に出会ったって、それを殺したり、悪戯したりするようなことは致しませんでした。田舎のわが家では、軒のところに青大将が棲んでいて、ネズミを捕ってくれます。ヘビに睨まれるとネズミは身動きができないのです。青大将に睨まれると、ネズミはすくんで、身動きが取れないのでうちにきれいに丸飲みされてしまう。そういうふうなところを実際に見ているものですから、ヘビはむしろ害虫じゃなくて益虫だということに思っておりました。そういう生活の中で、われわれはいろんなことを学んでいたのです。

ベーデン・パウエルのボーイスカウト運動が、シートンの『動物記』のウッドクラフト、つまり、シートンの「森林生活法」といわれるものと結び付いていったということは、あるいは、結び付いていったというよりも、最初から同じだったのでそういうクラフトを相互に学ぶことができるという状況が後に生まれたことは、私はやっぱり森の持つ生命力、あるいは野外生活の持つ大きな教育力のせいではないかと思っております。ですから、アメリカでもヨーロッパでも、皆さんもご存じのとおり、林間学校という野外生活はほとんどの国で重視されています。私はフランスには3年足らずしかおりませんでしたけど、そこでは、子どもたちは夏休みになると最低で30日、40日という期間をコロニー・ド・バカンスといって、ようやく日本でもやろうとしておりますけれども、ボランティアの指導者が子どもたちを田舎に連れていって一か月間余り遊ばせてくれるシステムです。勉強なんかさせません。ただ遊ばせる。子どもたちはいろんな野外の経験をしたり、

お話を聞いたり、野山で真っ黒に日焼けして遊び、とにかく生き生きとした目をして帰ってきます。コロニー・ド・バカンスから帰ってきた子どもたちがバスから降りて、「わあーっ」と喚声を上げて母親に抱き付いていくのを見ているのは、本当に気持ちの良いものです。日本では、スカウトであつても、こうはいかないでしょう。現在では10日間のキャンプにさえ耐えられないスカウトが少なくないのですから。日本の子どもたちはどうでしょうか。夏休みが終るころになると、親は子どもを2〜3日どこかへ連れていかなければいけない。混んでいゝる行楽地で父親は一生懸命努める。家族全員がもうへとへとに疲れはて新学期を迎えるというような日本とは、フランスはまるつきり違います。その父親の役割をボーイスカウトが組織的に担うというようになれば、社会的に大きな意味合いがあるとは思いませんか。夏休みにはスカウトの体験キャンプを大々的に展開すべきです。

### Ⅲ スカウティングの原点(2)

#### ——西田義雄隊長を中心として——

私がスカウティングの原点にこだわるのは、ベーデン・パウエルがいかなる使命をボーイスカウト運動に託したかということを確認しておきたいためであります。先ほど申し上げましたように、私は彼がグッド・シチズンの育成という国家的要請へ応える最も優れた方法論として、ボーイスカウト運動を開発したのだと思っております。では、自分の経験というものを考えてみたら、スカウティングの原点はどうであろう。私は自分の実体験をもとに考えてみようと思います。

私は愛媛県の宇和島第一隊、当時は団といわずに隊といっておりますが、その隊の一員として活動しておりました。そこでの日々は、もう愉快という一語に尽きます。優れた先輩たちがいたために、訓練そのものが実に楽しい日々でした。日経新聞(2003年4月5日)でも書いたことがありますけど、とにかく最初のキャンプの感動は心が震えるという表現では尽くしきれないほどのものであったことをいまだに鮮明に覚えております、それぐらい楽しかったのです。宇和島なんていうところは狭い土地でありますから、どういうふうな活動をしていったかといったら、週のうち、3〜4日がスカウト活動だったので、ですから、夜間活動、早朝訓練。夕飯が終ったところにすぐに自転車に乗った伝令がやって来て、何処どこへ何時に集合と知らせてくれるのです。早朝訓練も月に一、二回あります。朝早く窓ガラスに小石がバシバシ投げられて気付く。まあ、大声で呼ばなくともすぐ気付くようなところに寝ていなきやいけないということなんですけど、そうすると早朝5時ごろ、伝令が来るわけですね。それで6時には神社などに集合する。そこで、いろいろ訓練をやる。休みの日はキャンプに行るか、サイクリングであちこちに出掛けていく。一番遠いのは、宇和島から松山まで108キロ余りを、サイクリングする。当時の自転車は荷物運び用の大型の本当に重い自転車でありますから、とてもいまのように軽快に漕ぐわけにいかない。ですからこれを漕ぐのは大変しんどいわけでありまして。それに、途中にいくつかある峠なんかでは、大方は自転車を担いで坂道を歩くというようなことをやっております。サイクリングで遠出をして、へとへとに疲れはて向こうへ着いたらテントを張ってすぐに寝てしまい、翌日は何もせず飯を食ってす

「君、これ、雨が降ったらどうなるね？ 増水したら流されてしまわないか」と。山の中ですから、一雨くれば鉄砲水が出てくる。ですから、テントの位置はよほど考えて張らないといけない。私もその後、いろんなところでテントを張りましたけれども、よく川床近いところにテントを張っている連中が鉄砲水でバーンとテントを流されているのを見かけたものです。テント張りひとつでも、自分たちで自主的にやらせて、それを点検する中で、こういうときには君たち、いったいどう考えているんだ、こういうことがあったときにはどうするんだと、そういうかたちの指導だったのです。

宇和島市の教育委員会に勤務していた方でした。この西田隊長は、いまでも私たちの間では「隊長」「隊長」と呼ばれて愛されています、その隊長が口癖のように、いつも自分たちで工夫してやれ、自分たちでちゃんと考えてやれと言っておりました。自主性・自発性をとても大事にする隊長だったのです。もちろん、たとえば、最初のキャンプでテントを張ったときなんかでも、さすが隊長だけあって、目のつけどころが違い、なるほどと思ったものです。ある班のキャンプサイトをみて、「君、これ、雨が降ったらどうなるね？ 増水したら流されてしまわないか」と。山の中ですから、一雨くれば鉄砲水が出てくる。ですから、テントの位置はよほど考えて張らないといけない。私もその後、いろんなところでテントを張りましたけれども、よく川床近いところにテントを張っている連中が鉄砲水でバーンとテントを流されているのを見かけたものです。テント張りひとつでも、自分たちで自主的にやらせて、それを点検する中で、こういうときには君たち、いったいどう考えているんだ、こういうことがあったときにはどうするんだと、そういうかたちの指導だったのです。

つまり、最初からこうしなさい、ああしなさい、こうしては駄目だ、こんなことをしてはいけない、などとは言わずに、みんなに自由にやらせる。自由にやらせると、みんな思い思いの工夫をする。そして、中にはそれでパーフェクトの班もありますが、中にはそんなことまるで考えてなかったというようなダメな班もあるわけです。しかし、山や原野でそういう経験を積んでいくうちに、「なるほどな」ということを本当に納得させられる。何度か体験をすると、それ以降目配りや気配りが違ってくる。そういうふうに、実践を通して体得することを徹底的に重んじる隊長でありました。そのやり方を、まだるっこいというふうに感じている人たちもいたようでもありますけれども、私は西田隊長の指導法としては「急がば廻れ」であって、それが正しい方法だと思っておりました。なぜなら、子どもたちのやることです。子どもたちはいろんな能力をもっているのに、そのことを自分では知りません。その能力を伸ばすためにも、実践を重んじて、目配りと気配りの足りないところをしっかりと補ってやる。実践の中で、子どもたちの優れた長所を見出し、それをうんと伸ばしてやる、というのが、教育の本当のあり方であろうと私は思います。そして、それが西田隊長流でもありました。

ところで、みながら愛していた隊長であります、西田隊長は、今年の夏、88歳の米寿のお祝いをわれわれは宇和島第一隊の「古巣」である美しい溪谷「滑床（なめとこ）」でやることになっております。しかし、当時の西田隊長はとにかく小言が多く、いつもぶつくさぶつくさ言って怒るのですが、それも本気で怒る。だけど感情的には決してならない。だから、私たちは西田隊長が大好きなのに、陰ではみ

んなで「隊長怒れば、ブンブン、プブン。怒れば小言が多くなる」というようなざれ歌をよく歌ったりしており、その人柄を面白がっていたというようなところがありました。いまでもそうです。それが愛されているゆえんでもあります。

私が西田隊長から学んだものは、B-Pの考えそのものでした。ベーデン・パウエルがパトロールを中心にスカウティングを考えていたということは、小さな班の中でスカウトたちが自分たちなりの一つの秩序、自分たちなりの一つの人間関係という小さな世界（マイクロ・スモス）をつくっていく工夫とか努力とかができるには、パトロールの人数が最適だというB-Pの軍隊経験に基づく判断であろうと、私は思っています。それはまさに的を射た考え方というべきものです。班というものは軍隊の最小の組織の原理でもありますが、その辺りを中心にスカウトの組織の基本とするのが効果的だと考えて、ベーデン・パウエルは若者たちの実践の場をつくろうとされたのだろうと思っっています。加えて、パブリックスクールの寮生活やスポーツ仲間との自由であるが、しかし、規律ある生活での経験がパトロール自治、自主性というものとつながったということではないでしょうか。つまり、私が申し上げたいのは、私の狭い体験の範囲であつた、こうだと言っているわけじゃないんです。ただ、私たちはB-Pの考え方の基本をしっかりと身につけた隊長が好きでした。隊員から信頼され愛される隊長との出会い、これが私のスカウティングの原点なのです。ところで、宇和島という土地はボーイスカウト運動にとつての大きな貢献がひとつあります。宇和島藩は伊達家であり、幕末の四賢侯の一人、第八代藩主伊達宗城公という人がいました。この方の後継者

である第九代藩主には子どもがたくさんいました。その伊達の九男坊で、二荒芳徳（1886—1967）伯爵という人がいました。もうご存じだと思います。いうまでもなく、ボーイスカウト日本連盟の初代理事長であります。伊達家は、いろんな意味で非常に面白い人たちを生んでおります。壇一雄が『夕日と拳銃』という小説を書いておりますが、伊達の子孫が馬賊の頭領として活躍したという小説があつたことを、皆さんお覚えてはいないでしょうか。伊達家はそんな面白い人物を出しております。とりわけ、司馬遼太郎の書いたものに、幕末の宇和島藩関係の小説がずいぶん多いこともご承知のとおりです。この伊達家の中で、伊達第九代の藩主宗徳公の九男坊である伊達九郎が二荒伯爵ということになります。二荒（ふたら）という姓は、日光へ行かれた方はご存じですけど、二荒山神社という神社がありますよね。そのフタラという、何かこう、やんごとなき家なんだろうと思ひますが、そこへ養子に行かれた。そして、いろいろ活躍されたわけでありますけれども、あるとき、経緯はわかりませんが、このボーイスカウト運動に踏み込まれた。そして、ボーイスカウト日本連盟の初代理事長になられました。

宇和島には「天赦園」というお殿さまの立派な庭園がありまして、その中に二荒伯爵の記念碑が立っております。また、皆さんもよくご存知のごとく、山中野営場の中には二荒理事長の名前で出ている大きな石碑があります。この二荒伯爵のことを、何で私が話しているかというと、わが宇和島のことについて、ちょっとボーイスカウトと関係付けてお話ししておこうと思つたからであります。それは何かといひますと、宇和島藩は仙台伊達の分家だということになっております

けれども、実はある意味では本家筋といつてもよいのです。長男秀宗公が宇和島藩を建てたものですから、仙台藩に比べれば宇和島藩はむしろ、本家筋といつてよい。どうしてか。伊達政宗の長男秀宗は秀吉の猶子です。猶子というのは養子みたいなものですね。秀吉へいわば養子として人質に差し出されるわけですから。それで伊達政宗は徳川をおもんばかって次男に自分の跡を取らせるということになったわけでありませぬ。松平家と大隈重信の關係についても話したいのではありません。松平（頼武）さん、いらつしやるでしょうね。水戸徳川家と高松松平家の關係についても似たような話がありますし、お父様（頼明氏）の思い出もいろいろありますが、あまり横道にそれすぎないよう、ここは先へ進みましょう。

ところで、伊達家で天赦園という立派な庭園をつくったのは、長男だけれども本家を継がないで宇和島へ来た、その想いが宇和島の伊達家の中にはずつとあるんですね。本来ならば、やっぱり宇和島藩こそ、伊達家の嫡流であるという意識があるわけでありませぬ。そこで政宗の氣概を受け継ぐというような心意気もありまして、明治維新のときには四賢侯の一人として、倒幕の先頭に立つ結果となりました。先頭といっても、倒幕戦に兵を出さなかつたのがまあ、宇和島藩の運の悪いところであり、その結果、明治政府であまり重用されなかつたわけです。それはともかく、藩祖の政宗が「馬上少年を過ぐ」という、有名な司馬遼太郎の本の題名にもなつた詩を書いております。「馬上少年過、世平白髪多、残軀天所赦、不樂是如何」、残軀、天の赦すところ、だから天赦、天赦園という名前になるわけですね。「残軀天の赦すところ、楽しまざるをして、これを如何せん」と政宗は言っております。

つまり、戦場で散々もう働いてきたんだから、残っている余生くらい、多少楽しんだとしても、これは天も赦してくれることだろう、という詩を政宗は残したのです。

政宗が遊んだかどうか、私は知りませんが、宇和島藩伊達家は政宗の嫡流だという意識を脈々と受け継いできておりますので、この政宗の詩の中から天赦園という名をつけた庭園をつくつたわけでありませぬ。その庭園の中に二荒伯爵の碑がある。そういうことが、宇和島にとってはいわば一つの勲章であります。つまり、われわれはボーイスカウトとして田舎で活動し、制服もなかなかそろわないような隊でありましたので、私は、入隊後、制服を一年半ほど着られませんでした。やっと先輩のお下がりを入手して、制服が着られたときには本当にうれしかつたですね。それを、私は36歳のとき捨てたくなかつたんですけれども、パリ大学の交換研究員としてフランスへ発つ前に、不用品とともに処分したのです。いまとなつて、非常に残念に思っております。もつとも、残していても活用できたかどうかはわかりませぬが。それはともあれ、われわれ宇和島のスカウトは、やっぱりこの二荒伯爵の生誕の地である宇和島で、スカウト活動をしていたんだという、理屈にもならない一種の誇りのような氣分がいつの間にか先輩たちの間に生まれておりました。

そういう郷土のバックグラウンドというものがあつたのですから、それがやっぱりボーイスカウト運動にも非常に大きく反映したのではないかと、ふうに思われますのは、当時、宇和島だけでもボーイスカウトは第4隊までありました。周辺を入れますと、周辺の町に2隊ほどありましたし、それにガールスカウトが二団、カブスカウトが一



団ありました。あんな宇和島の、人口5万足らずのところ、よくそれだけ多くの団が活動していたものだと思いますけれども、それぐらゐスカウト運動は盛んであり、当時は、中学校のクラス委員は、たいていボーイスカウトの隊員であるのが当たり前だったので、校内放送で「宇和島第一隊、明朝6時、和霊神社境内にて早朝訓練を行う」なんていう校内放送をしていたという、そういう時代でありました。思ひ出すだけで、実に楽しい時代でした。

月夜の晩、ボートにスカウト仲間と乗り組んで海に漕ぎ出すと、夜光虫がきらめき、それは美しいものでした。宇和島湾の入り口には九島という大きな島があります。島には芋とかスイカが植えてあります。芋なんて取りに行くやつはいませんが、スイカの季節になると、われわれもボートを出して、スイカをひそかに盗り、海水で洗いながら食べるととてもおいしんですね。そして「いやあ、宇和島のタコはスイカを取って食べるらしいね」なんていうデマをいっばい流し、タコに責任を転嫁してわれわれの痕跡を消すなどというけしからん悪知恵も働かせたものであります。そういう意味では、悪いことも少しはありました。しかし、何というか、この邪気のない悪さというものは子どもにとっては非常に大切な遊びであります。法律家である私はいま考えてみても、これは泥棒であり、法律的には窃盗であるということだけは、確かにいえるわけでありますけどね。じゃあ、もうやっちゃいけないかと言われても、子どもだったらやっぱり、もう一回くらいやっていたでしょうね。そういう悪ガキの私たちを、あまり神経質にならないで見守ってくれる西田隊長のもとで、私たちは、そういう旧き良き時代を送りました。

ですから、ボーイスカウト運動における第一の原点が野外活動であるとする、第二の原点は優れた指導者の存在であるということになります。西田隊長のような少年の魂をもった優れた指導者がいればこそ、子どもたちはガキ大将であっても、悪ガキの悪さがあっても、問題はほとんど生じなかったのです。否、むしろそれこそが子どもの遊びのいわば原点でもあります。そういう子どもの遊びの原点みたいなものが、ボーイスカウト活動にはあった。それが楽しい思い出として残っているということは、指導者が優れていたからだと思われまます。スカウト活動はもつとも優れた指導者が指導する子どもの遊びそのものだからです。

もとより、訓練そのものが多くはゲーム化されているので、隊長は週に一回くらいは出てきますが、多くの場合は上級班長が中心で、親が出てくることなんてことは全くなかったのです。スカウトの一番の年長者はせいぜい高校の2年生ぐらいでした。高校2年生の隊付が威張っていて、われわれを指導していたわけです。だからといって隊長の順番は隊全体の訓練のときだけではないのです。週に一回ぐらいしか来ないからといって、隊長と週に一回しか会わないかということ、そんなことはありません。夕方、みんな街の銭湯で隊長を囲んで一緒に風呂に入って隊長の背中をさし洗っているような生活を私たちはしております。正月なんかは、独り者の隊長の家に3日間ぐらいわれわれも泊まり込んで、一緒になっていろんなゲームを楽しんでおりました。隊長はそういうふうなわれわれとつき合ってくれたのです。もう何と言いますかね、子どもの心になって徹底的に付き合ってくれような指導者がいたことがボーイの心に火をつける第二の原

点ではないかと、往時の西田隊長の姿を思い出してありがたく思っております。もとよりB Pも同じだったのではないのでしょうか。

話は変わりますが、ボーイスカウト運動の初代総裁（総長）である後藤新平先生。この方は大変な大物です。私は後藤新平こそ日本におけるボーイスカウトの原点だと思います。事務局長の吉田君が私にくれた資料を読んでみますと、後藤総長がこういうことを言っているんですね。「絶対に他人の世話になるな。しかし、他人の世話はせよ。世話をしても、絶対に謝礼は受け取るな」と、こういうことを言ったそうです。その後藤新平から、三島通陽総長が最後に「よく聞いておけ」と言われて、聞かされた言葉を残しておられますが、それは、「金を残して死ぬやつは下だ。仕事を残して死ぬやつは中だ。人を残して死ぬやつは上だ」というふうに言ったというんですね。こうした言葉は、ある意味で、スカウトの「魂」を伝えるものであり、「さすがわれらが後藤総長」であり、われわれがボーイスカウト運動に打ち込むのは、いったい何のためだろうかということ根源から考えさせられます。おそらく、それは、文字とおり、人を残すことです。人を残すということは、どういうことか。未来に希望の種をまくことだというふうには考えております。後藤総長が言われたように、人を残すことこそがボーイスカウトの運動の使命といってよいのではないのでしょうか。「人を残すを上とする」という言葉を私は、別のかたちでこれまでずっと使っております。といいますのは、私は武田信玄が実は大好きであります。関連書物を読むだけではなく、そのために私はもうどのくらい奥秩父の山々を歩いたことか。つまり、武田信玄を偲んであの甲斐の山々を歩いているわけです。もう、奥秩父の笠取小屋なんてい

うのは、私にとっては自分の別荘だというつもりで行っているぐらい、よく行っているわけです。武田信玄公の遺訓に入れこんでいるからであります。今年ももちろん、5月の連休に奥秩父を歩いて、笠取小屋で泊りました。そして大酒を食らいましたけれども、そこで、私がなぜ、その武田信玄にぞっこん入れ込んでいるかと言うと、幾つも理由があります。先ほどの後藤新平総裁の話に合わせていえば、それは武田信玄はこういっているのです。「九分の勝ちをもって下とす。七分の勝ちをもって中とす。五分の勝ちをもって上とす。」というんです。考えてみてください。九分の勝ち、つまり徹底的に、完膚なきまでに相手を破った。いったいどういうことだろうか。それがどうして下なんだと。つまり、そこまでやるためには自分たちも、ものすごい犠牲を払っているわけでありまして。そこまでやらなくても勝てばいいのに、それを徹底的にやるから、自分たちも、手痛い犠牲を払わざるを得ない。では、七分の勝ちは何で中なのか。七分の勝ち、そういうふうな勝ち方をすると中途半端である。つまり、恨みを残す。あいつにはもしかしたら勝てたかもしれないと相手に期待を抱かせるかも知れない。そういう勝ち方をしちゃいけない。五分の勝ちをもって上とする。五分の勝ちをすると、勝ったことは勝ったけれどもようやく勝ったのであるから、勝っても油断しません。そして相手も、まあ、結果としては負けたが、やれるところまではやったという、達成感じゃないですけれどもある程度の自己満足感が残る。やるだけやったのだからと、あきらめがつく。ですから「九分の勝ちをもって下とする。七分の勝ちをもって中とする。五分の勝ちをもって上とする。」ことになりまして。そして、私自身もこの言葉を守ってずっとこれまでやって

きました。

この4月に定年退職しましたが、それまで私の職場であった大学というところは、ある意味で議論の場があります。従って議論は徹底的にやります。しかし、われわれはこれで飯を食っているわけですから、徹底的にやられた者は生涯に渡って相手に恨みを残します。形勢が悪くなると、ああでもない、こうでもない、平気で屁理窟を並べ立ててきます。つまり、泥仕合になります。ですから私は、「この辺りでもう」「この辺りでどう?」とか言つて、相手の面子をできるだけつぶさないように配慮した勝負しかりしないことにはしておりました。徹底的に相手をたたきのめすことはこれまで学内では4〜5回しかありませんでした。そのときは、ここが勝負時と考えていたので、完膚なきまでに相手方をたたきつぶしました。もとより、そこまでやると、本当に人間関係を壊してしまいます。それゆえ、修復可能な程度に勝ちを制せばいいわけでありまして、そういうつもりで物事には対処すべきであります。特に団体の場合については、その構成員のことを考えると、勝利を捨てざるを得ないことがある。個人的にはいろいろ考えはあるだろうけれども、ベンタムのいうように「最大多数の最大幸福」というレベルを維持しなければいけないときがある、法律的に物事を考えていかなければいけないのと同じように、世間には多少のことは目をつぶって、「まあ、この辺りで手を打ちましょう」ということをやっていかなければいけないことがあるのです。それが本当の知性というものの働きでもあります。そのあたりの一見切り—については、西田隊長から学んだことも多かったようにも思われます。

そういうわけですから、何事であれ大改革などということは本当に

難しいわけですから。しかし、大改革といっても所詮は「小改革」の積み重ねだと考えれば、大切なことは指導者の「情熱」かも知れません。指導者にとって最も必要な条件は、この「情熱の持続」ではないでしょうか。頑張り続けなければいざれ勝利の日はやってくるのです。

#### IV スカウティングと教育のあり方

##### ——知性と野性を兼備するスカウトを——

次に私がスカウティングの原点を求めて何を話したいかと言いますと、ボーイスカウトと子どもたちの生活をどういうふうに見えるべきか、ということでありまして。もう一步踏み込むと、スカウトの野性についてであります。ご存知のとおり、ベーデン・パウエルはパブリックスクールのひとつである「チャーターハウス」の卒業生であり、ここでの学校生活をたいへん楽しまれた方でした。

私はずっと昔、高校生のころでありますけれども、トマス・ヒューズの書いた『トム・ブラウンの学校生活(上下)』(トム・ブラウンズ・スクールデイズ)、(岩波文庫)を読んだことがあります。お読みになった方がたくさんいらっしゃるのではないかと思います。この本は、明治維新直前の頃のイギリスのパブリックスクールの学校生活の話でありまして、パブリックスクールの中でも有名な、ラグビー校の学校生活です。ラグビーが発生したラグビー校での学業とスポーツのバランスのとれた楽しい学校生活であります。私がラグビーに興味を持っていたということもありまして、大学でラグビー部長になったころにも読み返したことがありますので、比較的本の内容をよく覚えており

ます。それを、この場でふと思いつきました。ラグビー校では、当時、この本に書いてある時代によくラグビーという競技が生まれたばかりの時代でありました。だからこの学校でのスポーツはラグビーでした。トム・ブラウンはラグビー・フットボールをやっていたわけですが。1823年、この学校の生徒たちがフットボールを楽しんでいます。一人の少年（エリス）が、いきなりボールをつかんで走り出した。両チームの選手はあつけにとられて、ただぼうぜんと見ておればかりだったんですね。だって、ボールを抱えて走っていくなんて、そんなフットボールはないわけですから。ところが、これは面白いぞということになって、次第にそれに工夫が加わり、現在のラグビーというゲームが誕生した。どうしてラグビーという名前になったか。これはもともと、フットボールの変種ですから、フットボールというふうにいわれたんですけれども、それが現在ラグビー・フットボールといわれるのは、ラグビー校で生まれた新しいフットボールだからであると、こういうことであります。

このラグビー校での学校生活を描く本書は、イギリスで大ヒットしただけではなくて、世界中で読まれる大ヒットになりました。それは、イギリスのパブリックスクールといわれる学校生活の典型的なあり方を、体験者である著者が感激をもって書いており、多くの人の共感を勝ち取ったからであります。そして、パブリックスクールといわれるものの中身は、一般的にいうと、午前中は勉強に集中して午後はスポーツに熱中するという文武両道の教育であります。これがイギリスのエリート教育の方法であります。私はボーイスカウトというものは、もしかしたらこのパブリックスクールといわれる教育方式の、いわば課

外授業のヴァリエーションの一つとしてつくられたクラブ・サークルのことではないかとさえ思うぐらい、このパブリックスクールといわれるもののあり方がボーイスカウトの教育に反映されております。いうまでもなく、B・Pがパブリックスクールの卒業生だったからです。パブリックスクールの教育は、いま言ったように午前中は授業、午後はスポーツ。これでイギリスのエリートを育てるわけでありまして。しかも、この連中のほとんどがオックスフォード、ケンブリッジに入学します。オックスフォード、ケンブリッジという大学は、現代ではアメリカのハーバード、エールと並ぶ有名な大学であります。エールとかハーバードとか、それからオックスフォードやケンブリッジといわれる大学は、現在でも世界の超一流の大学であります。学問的にすごいとの評価をうけている。しかし、そういう大学へ進むイギリスの学生のほとんどがパブリックスクール出身である。それだけ勉強もするが、しかもスポーツを徹底的に楽しんだ経験をもつ。加えて、イギリスの支配者階級の子弟が多いといわれており、イギリスの社会をリードするいわゆる政財界のリーダーを輩出しているエリート校であります。では、いったいどこが他の大学とは違うのであろうというところ、それは知勇兼備のリーダー、知性と野性を兼備するリーダーとしての資格を持つ若者、いいかえると、優秀なスカウトと同質の若者たちではないかと思われれます。

スカウティングというものは、一種のリーダー教育であり、エリート養成学校教育の変形でありますから、このボーイスカウトの中から社会をリードするような人物、日本社会のリーダーシップを取れるような人たちを育てるんだというぐらいの意気込みを持って、このスカ

ウテイングに取り組む必要がある。私たちはもう一回、このボイスアウト運動に正面から取り組んで、社会の隠れたリーダーを育てていく義務と使命があるのではないかと思っています。

たとえば、韓国でもそうだとすることを、韓国の方から聞きました。韓国ではボイスアウトは現在、30万人いるといえます。人口が日本の半分以下であることを考えてください。すばらしい成果です。しかし、そのうちの85%がカブで卒業です。韓国では、もう中学生や、高校生ともなれば強烈な受験競争にまきこまれ、勉強だけに集中しなければならぬ。したがって、スポーツをやる人たちもほとんどいません。中高生のわずか1%です。日本の60%とはかなり違いがあります。高校野球レベルでいいますと、日本の5千200校のうち、女子高を除けば、5千校もありませんけれども、4千600校が高野連に加盟しております。これに対して、1972年の体育特长生制度により、韓国の場合は、2千200校の高校のうち、野球部が存在するのはわずか52校です、野球はそれでも二番目に加盟校の多いスポーツであります。一番多いのがサッカーであり、これが80校余りあります。三番目がテコンドーであって、これが30校ぐらいです。つまり、韓国の高校では競技スポーツはほとんどやっていないんです。中学もほぼ同じです。韓国では、そういうふうなスポーツを学校ではやらない。何をやっているか、みんな受験勉強に集中している。そんなことやらない。でも、男子はどうせ軍隊に徴兵され、そこで確かに鍛えられますけど、生涯楽しむようなスポーツを身に付ける機会がなくなったということだけは事実であります。

だから、韓国でいま何がブームだと思いますか？ 大人はスポーツ

をやりたいと思っても経験がないわけですから、やりようがないんです。だから、スキルが問われない山登りということになるわけですね。私は富士山クラブの理事長をやっておりますので、今年も富士山に登りますけれども、2〜3年前に久しぶりに登ったときには驚きました。現在、富士山を登っている人の半分は外国人です。その外国人のうちの半分が韓国人なんです。つまり、富士山を登っている人の四分の一は韓国人なんです。それぐらい、韓国は登山ブームになっている。なぜ、登山ブームになっているか。はつきりしております。韓国の山がきれいで低いということも大きな理由です。多くの山の頂上付近は岩山です。植林が遅れましたが、多くの山は土が長年のうちに雨に洗われ、美しい岩山となって本場にきれいです。しかし、それもありますけれども、基本的には中学、高校でスポーツを楽しむ経験をしていないことが原因ではないかと思われれます。ですから、時間に余裕ができて、何かスポーツをやるとなると、ハイキングという選択になる。そういうことのようなのです。

パブリックスクールはスポーツにかなり力を入れていながら、教育レベルが高く学者も出す、軍人も出す、政治家も出します。とにかく社会のあらゆる分野で活躍する優秀なリーダーを輩出しているのがパブリックスクールの教育なのです。このパブリックスクールのような学校は、日本にはあり得ません。そんなことをやろうと考えても、私は早稲田大学で係属の高校をそういうふうにしたとずいぶん考えましたが、カリキュラム上無理というより不可能でした。しかし、全寮制の旧制高校のような学校制度はいまでもあつてよいのではないかと、思っております。

私は、総長として、勉強もさせ、スポーツもさせるといふ文武両道、知勇兼備という人間教育を高校で実現しようではないかと付属校に申し入れたのでありますけども、賛成を得られませんでした。しかし、系属校の早実だけは、全員クラブに入らなければいけないということにしておりますので、かつてインターハイに出場するチームは早実でも10チームもありませんでした。現在では40〜45チームが出ています。40〜45チームといったらすごい数ですよ。私が宇和島東高校時代、インターハイに14チームが出場しました。そのとき体育の担当の先生が泣きました。こんな大成果を上げたことは歴史上ないことだと。この教師はこんなことはもう二度とないだろうと言って泣きましたが、その後どうなっているかは私は知りません。ところが、早実では40〜45チームがインターハイに出場するというような状況が常態化しております。つまり、早実の生徒は大学へ全員進学できるわけですから、授業は校内ではものすごく厳しくやりますけれども、スポーツは必ず全員やれというふうに奨励しておりますので、みんなが頑張った成果であります。

スポーツがやれるという条件が日本でもなくなりつつある。私は、イギリスが七つの海を支配し、日の没することのない世界帝国を築いた、だからわれわれもそれをまねしようなんてケチなことを言っているわけじゃありません。そういう意気込みというものを、いまの日本で、自分のことしか考えていない若者たちに、もう一回ショック療法としてたたき込む必要がある。そういう意味では、ボイススカウト運動に、おそらくBIPも考えたであろうように、このパブリックスクールにおける、午後のスポーツ活動に代わるぐらいの意味合いを持

たせることができる、日本の青少年に次代の夢を託せるような、たくましいスカウトをつくっていくことを考えなければならぬのではないのかと、私は考えているのです。スカウトであるかぎり、甘いといわれようと無謀といわれようと、それを試みる義務があるのです。私は、このボイススカウト運動というものは、パブリックスクールが目指したものの、つまり、タフで思慮深く、豪毅で思いやりのある、義務感と責任感に富む人間をつくっていくことが、目標とならねばならないと考えています。現今の世の中は、すべて権利、権利、であります。もちろん、法律の考え方は権利を中心に組み立てられています。債権債務というのは、まさに権利義務の関係であります。つまり、権利と義務は背中合わせなのです。そして、現代は権利を中心に考えられておられます。権利が法律のもとであり、物事は権利から法律構成していかなければいけないことは当然であります。しかし、そのために、持てる者の権利のみが強調されて、持たざる者の権利がずると後退していくんではないかと心配です。私は世界中を見て、日本はそんなことはないと思いますけれども、亡国の予兆を日本の現状に見出す人たち、次第が増えてきております。ですから、私はいまの世の中で必要なのは、権利を振りかざして、「ゴネ得」をあたかも権利の行使のように考える人ではなく、ヤセガマンを張り、社会や時代を支える義務を進んで負うような人間を育てる必要があるとすれば、それはもうボイススカウトをおいてほかにないのではないのか。ボイススカウトの、本来の発想は、自分たちは世のため人のために汗を流さなければならぬという責任感を基礎としています。つまり、スカウトは社会に対する義務感を持つ人間なのです。

強い義務感、あるいは公共心に富む青少年こそは、ベーデン・パウエルが望んだ人間であり、その育成こそがボーイスカウトをつくった目的であります。自分たちは世のため、人のためにどんな義務を負うか、その使命感、あるいは責任感というものが、そういう義務の観念を中心に組み立てられた社会のあり方を構想するからこそ、ベーデン・パウエルはボーイスカウトを創設したんだと、私は思っております。法律的に言えば、先ほどから言っておりますように、権利を中心にわれわれは考えざるをえません。憲法の規定をご覧になりますとよく分ります。要するに国民の権利・義務は権利を中心に規定されています。それが明治憲法をつくるときに一つの問題でした。明治憲法制定の際に森有礼は最初の文部大臣として、国民の権利ではなく、「臣民の分際」とすべきであると述べたごとく、義務一辺倒の発想でした。起草者である伊藤博文はプロシアの君権専制政治を学んだにもかかわらず、近代憲法の制定者としての見識をもっていただけあって、さすがに法律的には権利を中心に組み立てねばいけないと考えました。そして、国民の三大義務というものを残したわけです。すなわち、教育を受ける義務、兵役に服する義務および税金を納める義務という、三大義務といわれるものがその全てです。しかし、権利のみが主張されるギスギスした社会は、漱石のいう「智に働けば角が立つ」という社会であり、決して居心地のよい社会とはいえません。ほどほどに市民的義務が強調される「義務を自覚させる社会」を創ることを考えねばなりません。資本主義の社会でも、表があれば裏がなければいけません。日本資本主義の父といわれた渋沢栄一は、現在上場会社である4千社の大企業の中の500社を創設しました。いわば、日本のこれ

はというほどの会社は、全部渋沢がつくったといっても過言ではありません。いずれも歴史ある日本を代表する会社が500社というわけですから、たいしたものですよ。渋沢がつくったんです。しかし、同時に渋沢は社会事業を600やった。つまり、病院を建てた。商工会議所をつくった。証券取引所をつくった。商法講習所（一橋大学）をつくったというような社会的なインフラ整備をやったのです。産業的なインフラに当るものとして電力会社とかガス会社などもつくっております。そういう社会のインフラに当たるもの、いわゆる公益事業を中心とした社会的事業はみんな渋沢がやったことなのであります。

資本主義社会は、一方で営利事業で儲けられるだけ儲けることができるけれども、同時にそれだけでは、社会の健全性は確保できない。社会が健全であるためには、社会のインフラともいえるべき社会事業といわれるものをしっかりと整備しなければいけないということを明治の人である渋沢はよく分っていた。彼のバランス感覚は抜群でした。つまり、一方では権利を主張し、自由に儲けさせてもらうが、他方ではそれに見合うだけの儲けを社会事業につき込んで、世の中のバランスをとるためのインフラ整備につとめるということをちゃんと並行して進める義務感をもっていた。残念ですがそういうバランス感覚を持つ実業家は今では非常に少ない。

現在、私の専門であるコーポレート・ガバナンスとか、コーポレート・ソーシャル・リスポンシビリティ（CSR）とかがようやく強調される世の中になってきました。だからといって、社会的なインフラに企業の収益を投入する決断のできる経営者はほとんどいません。高配当を求める株主の追及がこわいということもあります。今年の11月

にはISO26000（組織の社会的責任に関するガイダンス）が正式発行になれば、経営者のマインドも多少は違ってくるかもしれないが、この不況下ではやはり難しいかもしれません。しかし、だからこそ、スカウトの魂をもった経営者、政治家、教育者などが待望されるのです。そういう人間が出てくれば、世の中に希望が生まれる。われわれは希望のない未来をめざして生きていくことはできません。キエルケゴールの『死に至る病』とは絶望のことです。しかし、死に至る病に罹っていないとしても、未来というものを信じて、希望を持って生きていける社会をつくるためにはボーイスカウトの出版を考えなければおかしいでしょう。われわれも頑張つて、それくらいのタフで、志の高いスカウトを輩出したいものです。

われわれは、ラグビーでよく言いますように、「In the field, we are the worst enemies. But, out of the field, we are the best friends.」という表現をします。闘うときには、最悪の敵だと思われ、しかし、闘いが終わったあとは、最上の友人だと言われるような人間関係をつくっていくという、つまり、私たちが考えていくのは、何でもかんでもタラタラいいかげんに対応する、そういうクラゲのような若者をつくることではなくて、ラグビーのフロントローのように全力でぶつかると。「ワン・フォア・オール、オール・フォア・ワン」という心意気を持つタフガイ。そういう若者の育成を私たちは考えていかなきゃいけない。では、そのためにどうするべきでしょうか。イギリスではパブリックスクールといものがつくられており、そこでは「奉仕」の精神を徹底的にたたきこまれた「社会のリーダー」教育がされた。日本でも昔のナンバースクールと言われる旧制高校ではそれに近い教育が行われた。スカウ

ティングは、パブリックスクールと軍隊で鍛え上げられた経験から「帝国の落日」を予感したベーデン・パウエルが、帝国を支える「奉仕」の精神に満ちたタフな若者を育成し、帝国の防波堤とすることを目指して開始したものであったといつてよいでしょう。そうである以上、「亡国の兆し」におびえるわが国で、スカウトがいま頑張らずしてなんとする、というのが私の想いであります。われわれのスカウティングはこうした国の命運を決するときこそ発揮されるべきなのです。

では、パブリック・スクールの教育は若者をどう勇気づけるのでしょうか。それは、池田潔の『自由と規律』（岩波新書）を一読すればわかることです。私は中学生のころ、感激して何度も何度も読み返したものであります。パブリックスクールの生徒たちは、寮生活による濃密な仲間意識で結ばれた人間関係の中で、お互いに切磋琢磨します。常にチームプレーを心がける、徹底的に議論をする、場合によっては力づくの喧嘩をする。そういうことを通じながら、イギリスの社会を指導することができるような、騎士道精神に基づいて生きるタフな人間をつくった。つまり、イギリスの古い貴族社会といわれるものが壊れたあとでも、貴族社会の最良の部分、そういう精神を引き継ぐリーダーを養成する学校としてパブリックスクールが生まれる。そして、さらにボーイスカウトが生れるのです。こうした騎士道精神というもの、それは日本の武士道精神とほぼ同質ものですが、その精神を私たちはボーイスカウトの精神として受け継いでいこうというわけです。イギリスの「noblesse oblige」、つまり、「高貴なるもの（貴族たる者）は困難を引き受ける義務がある」というわけです。この義務というものは何か。イギリスは日本とは違うんです。戦いときには、貴族は



最前線に立たなきやいけない。貴族や、天皇一族も日本では絶対に前線には出さなかった。しかし、イギリスの伝統では、貴族は矢弾の当る最前線に出なければいけない。そして、平時においては、その人たちはボランティア活動で誰よりも汗を流さなければいけない。最もたくさん寄付をしなければいけない。イギリスにはそういう社会的な伝統と精神というものをしっかりと引き継ぐパブリックスクールという教育機関があり、その精神を一般化するスカウト制度がある。日本にはそれが無い。そういうものを日本でも本来なら、このボーイスカウトが受け継いでいかなければならなかったのではないか。そういうことも感じるわけであります。スカウトは、その精神において騎士でなければならぬのです。そして、スカウト活動はそのための学校なのです。

時間がなくなりました。話が横に飛び出しすぎましたので、予定した話の半分しかまだ話しておりませんので先を急ぎます。さて、私は、ローマの話をもっと話したいと思いました。どうしてローマの話をしたか。ローマの千年の歴史は、人類のあらゆることをすでに何度も経験しているからです。それゆえ、私は、このローマの歴史の中から、ボーイスカウトがこれから克服していかなければいけない困難に対しての幾つもの有益な教訓を導き出すことができるのではないかと思うのです。ローマがどうして衰亡したか、その原因はモンテスキューがその著書『ローマ帝国盛衰原因論』で二つの原因を指摘しております。一つは、日本が満州に展開した関東軍の横暴で、国を滅ぼしたのと同じ理由であります。戦前、80万の最精鋭部隊である関東軍が満州に置かれており、それが日本政府の方針を破り、満州事変を惹き起し第二次世界大戦への道を開きました。そういう軍の横暴が日本を滅亡へと導いたの

です。それと同じように、ローマ軍は占領した外地に長期間駐留していくようになる、その地で軍は独立性を強めて祖国に敵対するようになり、祖国への忠誠心というものを失っていったのです。もう一つの原因は、ローマがその版図を広げていって、ローマ市民の範囲というものがどんどん、どんどん拡大していった。そのことによって、どうして問題が起ってきたか。つまり、それまでのローマ市民というのは、ローマを守るためにはなにをしても全力を尽くすという忠誠心、ローマを世界帝国とするために奉仕するという公共心を持っていた。しかし、広がった版図で新たにローマ市民の資格を得た者たちは、そういう精神を持ち合わせていなかった。そのため、ローマは次第に結束力を失ってバラバラに解体していくのです。

私は、ボーイスカウト運動といわれるものの衰退の原因というものも、やっぱりこのあたりにあるのではないかというふうに思っております。どうしてかという、たとえばの話です。スカウト運動の衰退は、駐留軍が強くなって、ローマに対する忠誠心をなくしたローマ軍と同じだというのはないんです。私が言いたいのは、そうじゃなくて、長く続いた高度成長の豊かさの中で、スカウトがその魂をいつの間にか失っていったために、スカウトとしての活力が弱まったためではないかと思っております。同時に、連盟の方針自体も、みんなを引き止めたり、みんなに楽をさせたりするためにどんどん安易な方向へ妥協していった。私は、子どもにとってはスカウト運動というものは楽しくなければいけない。楽しくなければスカウト人生ではないということをいつも言っております。けれども、スカウトとしての厳しい自己規律を養成する訓練を怠ってよいことにならない。しかし、な

にがなんでもスカウティングは楽しくなければいけない。みんなが楽しむためには当然、あらゆる工夫も必要であり、絶えざる努力も必要である。そのため、ゲームもいろいろやりました。毎日が本当に楽しかったので、そのゲームを始めるともうみんなが夢中になったものです。たとえば、羅漢回しであるとか、班対抗のジャンケンゲームとか、複雑なチャリンコオリエンタリングとか、いろんなことをやりましたね。ゲームの名称がわからないので、いや、ゲームの名称がもともとないために、例示をたくさん出せませんが、とにかくみんな楽しんでるようなことは決してありません。われわれはわが隊のウッドクラフトのスキルは、どこにも負けないという自負心をもっておりました。最近ではボーイスカウトの会合は土曜か日曜に週に一日だけ集まっているようですが、私たちはほとんど毎日がスカウト活動でした。旧き良き時代というべきでしょう。つまり、毎日の生活自体がボーイスカウト活動だったのです。

ですから、私が言いたいことは、いまの時代の活動では量よりも質が大事ではないかということ。これがボーイスカウトだということ、スカウトの精鋭を育成する必要があります。その活動を見た人たちがスカウトとはこういう青少年をいうのだ、と共感を覚えるようなスカウトを育成する必要があります。こうした活動を自分の子どもにもやらせてみたいと思い、子どもは子どもで、スカウト活動を見ていて、こんな活動だったら自分も参加してみたいと思う、そういう気合いの入ったスカウト運動というものをもう一回建て直してみようではありませんか。そこで、精鋭部隊をつくる方法がありますが、もとより、

こうすればよいという決まった方法があるわけではありません。全ては指導者の熱意にかかっております。中学生以上には特に優れた指導者が必要です。ローバーとかベンチャーから選抜して、新しい団をつくり、競わせてみることも試してみる価値があります。もともと、ビーバーやカブに若い情熱を持った指導者を当て、モデル団をつくることも考えられるでしょう。問題は中学生をボーイスカウトに定着させ、スカウト運動の起爆剤とするための方法です。そのための方策の一つは、ウッドクラフトのスキルを徹底的にたたき込むことが必要です。そのための指導者を早急に育てる必要があります。野外活動を通じて、スカウトが何を目的とし、スカウト個人が何を目指しているかということ、頭ではなく、体で体得させ、世のため人のために汗を流し、涙を流す人間を養成するのだということを野外活動の中で自覚させることです。ローバーとか富士スカウトさえも数の上ではたくさん出てきておりますけれど、この人たちの中でどれくらいスカウト魂を体得している者がいるであろうか。その意味でバッジ・システムは本物のスカウト養成にどれほど寄与しているか検証してみる必要はないでしょうか。自然の中での活動に同調するようなハートをもつ若者、自然から生きる力を吸収することのできる「たのもしい」青少年を多数育成する中で、これがスカウトの後継者であるといえる「たのもしい指導者」を早急に養成しなければならない。こうしたリーダーシップを身につけたスカウトこそ本物の富士スカウトの名に値します。

私は少し大げさなこと言っているのかもしれませんが、あまりにも、モデルとして中世世界の理想像の騎士を挙げすぎ、あるいは武士道精神への回帰を強調しすぎたかもしれません。しかし、スカウト魂のモ

デルとしては、高貴なる魂の持主にふさわしい品格を備えたスカウトのイメージからすれば、武士とか、騎士とかが思い浮かぶのは仕方ないことであり、ベーデン・パウエル自身もスカウトのモデルとして同じイメージを示しているのです。念押しのために、モンテスキューの名言をここに掲げておきます。それは、スカウトが忘れてはならないフィロソフィーだといってさしつかえありません。「カルタゴは富裕な国力をもって貧困なローマに挑戦したが、それがため不利であった。金銭は枯渇するが、徳性、忍耐力、気力、清貧は枯渇することを知らない」のであると。言葉ではなく、この精神を私は西田隊長の生き方から学んだような気がしております。

中世末期からのヨーロッパにおけるエリート階級の子弟の成人の通過儀礼、つまり、一人前になるための通過儀礼は、グランドツアーでありました。イタリアを中心とするヨーロッパを1年ないし2年かけて旅行して学んでいくわけです。つまり孤立無援の旅の中で、一人前の人間として鍛えられていく武者修行です。これがヨーロッパ中世の教育の仕上げでした。そういう体験を経て知性だけではなく、野性をも備えた心身ともたくましい一人前の男に仕上げるのが、中世ヨーロッパの成人教育の方法でした。そして、日本の武士道もまた武者修行という言葉がありますように、学問であっても、それから剣術、武道そのものであっても、日本中を回って社会的に鍛えられてきたわけでありませう。旅によって人間を鍛えたのです。

どうして旅により人間が鍛えられるのか、それは簡単であります。「旅」ですから未知の地、つまり、知らない土地を訪ねるわけです。知らない異郷で生き残る能力を身につけた人間、あるいは知らない

ころでも大事にされるような人間になるということが、人間としての、いわば成熟した男のあり方であります。そういう人間として成熟するためにグランドツアーという成人儀礼があり、武者修行があったというふうには考えているわけでありませう。そう考えてみますと、この旅というものが持つ独自の意味合いは非常に大きい。野営という小さな旅が、スカウトの訓練、青少年の本当の教育であります。「野営は小さな旅」なのです。そういう旅の中で人間は、一人前の人間として教育され鍛えられていくのです。スカウティングには、旅の持つ教育効果のエッセンスが含まれています。

## V 結びに代えて

——「スカウト魂」とはなにか——

もっといろいろお話したいんですけども、時間がありません。最後に、私が考えております指導者論をもう一度強調して、終わりに致します。スカウト魂の権化たる指導者待望論がそれです。

スカウト魂の権化のごときスカウトを育てていくために、われわれにはどのような指導者が必要であろうか。指導者というものは、私はいろいろ考えてみたところで何か言ってみるとすると、どういうことになるでしょうか。政治的な見識を持っているとか、教育者であるとか、いろんな野営の小技を身につけている専門家であるとか。しかし、そんなことではないと私は思っております。指導者というものにとつては、そういうことが大事なのではなくて、子どもたちが大好きで、子どもたちが一斉に振り向いてくれるような、そういう人間の魅力

もち、活動の目的を明確に指示することによって、人だと私は思っております。つまり、知性に二重で、野性味をもった柔軟な思考のできる指導者ではないかと思われまます。いうならば「たのもしい」リーダーです。それは完璧な人間ということを意味しません。子どもはいつも少し間の抜けた人が好きなのです。

スカウト魂を育てるために、指導者は子どもたちをどう訓練するか、その目標設定が必要となるが、それは対象年齢によっても、地域によっても、また、環境によっても異なるであろうから、具体的な目標設定は容易なことではない。というのは、われわれの社会そのものが構造変化を起こしてしまっているからです。それが少子高齢化社会、高度情報化社会の到来であり、子ども社会の縮小、消滅の方向性の急激な進行です。それゆえ、いまや個人としてのスカウト数の減少どころか、組織としての団の消滅の危機に直面しており、スカウティング自体のサバイバルを視野に入れなければならない事態を迎えております。そして、なんと市民社会そのものまでもジャングルの法則が支配しようとしているかのごとき市場社会化が急激に進行しております。残念ながら、現在の人間社会ではいつの間にか、ジャングルの法則が大きな顔をしてのし歩き始めております。これは、驚きですね。私は、人間社会だから、もつとまともなジェントルマンの世界が維持されているはずだと思っていたら、紳士面した人たちにより、いつの間にか弱肉強食、優勝劣敗のジャングルの法則があちこちを静かに支配するようになってきている。こういう社会環境の下で生きていくためには、知性だけではどうにもならない。野性をもったたくましい人間が必要です。だからこそベーデン・パウエルはスカウト運動を創始したのです。

こうした状況下では、スカウトとして訓練を受けたタフな体力と神経をもつ若者の、一糸乱れぬチームワークがなければサバイバルできない。うまく立ち回って生き残ろうなどというような小手先の対応では押しつぶされてしまいます。ボーイスカウトがリーダーの養成を目標にすべきだというのは、この混乱した社会、世相において、未来の希望を明示してくれるリーダーであるスカウトを養成する必要を痛感するからです。いま、スカウトは、明快な目標に向かって少数精鋭主義をとることを恐れるべきではありません。座して全滅を待つよりも、着実な希望をつなぐべきです。いまや、「小事が大事」なのです。みんなが一日一善を着実に実行する心意気をもって、スカウトは精鋭部隊として社会的にブリアントな存在をめざすべきです。そこでは一人ひとりのスカウト魂がものを言うはずで、そこでこそスカウトの真価が問われるのです。「スカウト魂」とは、モンテスキューが述べたように、「徳性、忍耐力、気力、清貧」を身につけた品性の高いスカウト精神をいうからです。これまでスカウト運動は、一気に発展した反面、日本社会に深く根付くにはまだ時間が足りません。CSR（企業の社会的責任）の国際規格化であるISO26000の正式発行など、スカウトにとってはむしろ、ようやく社会的活躍が期待される環境が整いつつあります。ここで、トム・ブラウンのあのパブリックスクールを思い出してみてください。指導者、つまり校長は、ひそかに生徒たちを見ているわけであり、そして、一人ひとりの生徒に最も適切な処方を与えています。この生徒には、こういう生徒を組み合わせ、同室にして暮らさせれば、その生徒たちにとってより教育効果があるのではないか。この生徒には、この課目の勉強をこうやっ

て分らせるべきだなどと、一人ひとりについて校長は全体を見て適切な指導をしている。そこにB・Pも学んだパブリックスクールというものの存在意義の一つがあります。つまり、個性を伸ばす教育です。

同じように、ボーイスカウトの団委員長はパブリックスクールの教師と同じく、スカウトの一人ひとりをよく観察しそのスカウトの力をもっとも適切に引き出す。本当に良いスカウトとして育てていくために、団委員長など指導者が一人ひとりのスカウトをよく見極め、その力を最大限に伸ばすように責任を持って指導しなければならぬ。そのための教育目標は、私自身が大学のゼミ教育の目標にしております。「自恃自信」、自らを恃み、自らを信じ、「自反自責」、自ら反省し、自ら責任を負い、「自活自修」、自主的に活動し、自ら進んで学ぶ、自律的活動により独立を心養うというふうな実践力・行動力をもった学生たちを育てる必要があると、大学ではいつもそう考えておりました。それは、ボーイスカウトについても同じことです。しっかりと信念を持ち、独立心が強く行動力のある人間を育てることが、スカウト運動の究極の目標ではないか。私はそういうふうと考えております。

ちょうど約束の時間になりました。そこで、最後にあえて一言蛇足を加えておきたいと思えます。唐突のようですが、私は、世の中というものがどうやって成り立つかというところ、それは「希望」というものの存在だと思っております。そして、われわれの希望は若者たちです。つまり、若者たちしかわれわれの希望を託する者はいないので。いま日本に何が残されていますか。天然資源があるわけじゃありません。何か特別な資源があるわけでもありません。あるのはこの美しい自然と、次代を担うべき若者だけです。私自身は、最近でこそ、日本の自

然環境をどうやって守るかということにも全力を挙げて取り組んでおりますけれども、人生の大部分は人づくりをどうするかということに教育者として取り組んでおりました。そして、いまでは、ボーイスカウトの育成にこれからの余生は全力を挙げて取り組んでいきたいと思っております

その私がいつも勇気づけられているのはアレキサンドル・デュマの次の言葉であり、私があちこちで何度も繰り返し引用しているもので、「人類のすべての英知は、次のたった二つの言葉に込められている。それは、待て、そして希望せよ」(Toute la sagesse humaine sera dans ces deux mots : Attendre et Espérer.) という言葉です(デュマ『モンテ・クリスト伯』)。「待て」というのは棚ぼたのように、口を開けて、ぼた餅が落ちるように幸運が舞い込んでくるのを待てという意味じゃないということはお分かりですね。それは時間がかかるかも知れない。しかし、しっかりと努力してスカウトを十分に訓練してこう。そして、そのスカウトたちにわれわれの未来と、われわれの希望を託そうということです。

そういう意味では、われわれは、このスカウト運動というものを、いまこそ原点に立ち戻って、スカウトの魂を取り戻し、未来の社会の指導者としてスカウトたちを育て上げるためのあらゆる努力を必要とします。その長く辛い作業にこれから改めて取り組もうではないかというのが、今日の私の話にこめたメッセージであります。

終わります。ご静聴ありがとうございました。

「スカウティングの原点を求めて」

——スカウト魂とはなにか——

発 行：平成23年5月10日

著 者：奥島孝康

発行者：公益財団法人ボーイスカウト日本連盟

©Takayasu Okushima 2011